さらにもっと“いっぽ”～複数の目で子ども一人一人を育てる教育観への転換～

令和の岐阜小型『ふるさと大好き』へ進化

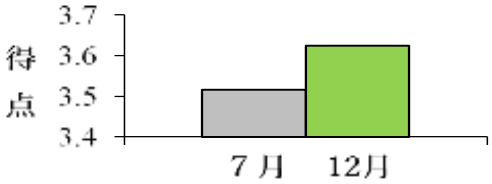
～全ての「子どもを主語」にした大人（学校・保護者・地域）のつながり（連携から接続）へ～

R7.2.21 岐阜小学校長　清水也人

～令和６年度「学校アンケート」より～

回答のご協力をありがとうございました。岐阜大学教職大学院教授 吉澤寛之 先生から多面的･多角的にデータ検証いただいた中で、今年度最重要課題としてきた以下の項目に焦点をしぼり、成果と課題から来年度への方向性を示させて頂きます。

児童回答「１.自分にはいいところがある」：アップ↑↑



【関連】学級差が減少

行動
- 合同、教科担任授業等：**複数の教員による子どもの価値づけ**
- 「子どもを主語」にした**教員同士の日常的・共通目的的なつながり**

「児童回答１」は、以下の「保護者回答」項目と密接な関わりがある。

6.　学校の職員は、子どものよさを大切にし、誉めている。↑

9.　学校は、保護者と協力して教育活動を進めようとしている。↓

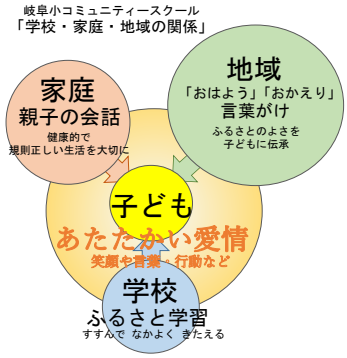
15. お子さんは、ＩＣＴを活用している。↑

17. 家庭では、楽しかったことや嬉しかったことを話せる雰囲気がある。↑

18. 家庭では、家族に不安や悩みなどを話せる雰囲気がある。↑

22. 『ふるさと大好き』を目指し、活動を工夫して行っている。↑

本分析を通して、**複数教員で子どもを見取る**ことは**「自分にはいいところがある」と感じる子どもたちの学級差（凸凹）をなくし、学校全体の安定・居心地のよさ（自校肯定感）につながる**ことがわかりました。また、地域についても、同様に家庭差（凸凹）がなくなることが安定・居心地のよさ（≒「ふるさと大好き」）につながることが研究でわかってきています。



【理念】　ふるさとステーション「岐阜小」で育てる全ての子どもたちに、多くの大人（学校・保護者・地域）が、あたたかい愛情表現（笑顔や言葉、行動など）でつながり合えば、全ての子どもたちが「自分にはいいところがある」と気づき、自己有用感・肯定感が育つ。自己有用感・肯定感が十分育った子どもたちが集まれば、他の人を尊重し合う仲間となる。そんな子どもたちが大人になった時には、持続可能な循環型のあたたかい地域社会（≒「ふるさと大好き」）を創造できる。

さて、岐阜小学校区の強みは、「ふるさと大好き」を合言葉に「子どもを主語」に連携する地域の大人が多くいることです。しかし、コロナ禍がつながりを避ける風潮をつくり、本理念を“いっぽ”進める心理的阻害要因「入ると迷惑かな（遠慮）」「自分（たち）だけでいっぱいいっぱい」「誰かがやってくれる」「自分（たち）さえよければ」「二項対立の陥穽」等といった見えない「壁」が大きくなっています。さらに、学校においては国家的に問題となっている教員不足と労働過多、地域においては高齢化が進んでいる今、大人（学校・保護者・地域）の体制改革は急務だと考えます。

子どもにとっての１年間（生活時間）は、時間で換算すると「学校：１８％」「家庭：８２％」、「地域」時間は「学校」「家庭」の関わりに委ねられています。

限られた「１８％」の学校時間を、学校が子どもを主語にした「ふるさとステーション」として、大人（学校・保護者・地域）が効率的かつあたたかくつながる体制に変換することが大切だと考えます。

■複数の目で子ども一人一人を育てる『学年・すくすくチーム担任制』

- 学年・すくすく学級の教師が、教科・領域等を分担・交替しながら複数の目で子どもを育む。
- **『教科担任制』『合同授業』等**をフレキシブルに実施する。

【令和６年度の手応え、令和７年度さらにもっと“いっぽ”】

○どの学級も、子どもが落ちついて学べるようになってきた。

○子どもは、多くの先生との関わりの中でどの先生にほめられても違和感がなくなってきた。

○教師は、他の学級と関わることで本校がめざす子どもの姿を共有できるようになってきている。

▲保護者との協力 →リアル・多様・参加しやすい接見、共有の場（以下■）を設定する。

→保護者が相談窓口の選択に迷わないように担当学級を設定する。

■日常的に大人（学校・保護者・地域）がつながる『ボランティア・システム』の整備・構築

- 内容：教科学習、校外学習、日中支援、行事支援、環境整備など
- ２ヶ月ごと２０日頃、下校時刻配信と同時に募集する。